

アルコール依存症領域の作業療法の文献レビュー

古 賀 誠

Literature review of occupational therapy area of alcoholism

KOGA Makoto

抄 録

WHOは、アルコール有毒使用による健康問題を世界的規模で減らすように指針を示している。日本は2002年に健康増進法が制定され、健康日本21のなかでアルコール関連問題への対策と方針を打ち出している。国内アルコール依存症者は80万人と推計されているものの、実患者数は5万人程度である。平成22年度（2010年）のアルコール依存症者入院治療の診療報酬改定時には重度アルコール依存症入院管理加算が認められ、これまでもアルコール依存症の治療を担ってきた作業療法士もその施設基準の職種となった。

今回は「アルコール依存症」と「作業療法」をkey wordに、国内外の文献レビューとアルコール依存症領域の作業療法についての検討を行った。

その結果、日本ではアルコール依存症領域についての作業療法の方針が統一化していないが、AOTAではアルコールを含む物質関連障害に対する作業療法の役割やサービスが描かれていた。

キーワード：アルコール依存症

作業療法

World Health Organization

アルコール関連問題

はじめに

古くから、農耕民族である日本人にとって、貴重なお米から作られたお酒はお神酒として祭りに欠かせないものとして存在している。現代においても我が国は飲酒を社会的に肯定する文化をもち、アルコール飲料は安価にかつ容易に入手することができる¹⁾。このところの自動車飲酒事故や自殺問題などの社会背景と絡んだアルコール有害使用により、ようやく社会の関心が高まっているところである。

アルコール依存症は、ICD-10 (International Statistical Classification of Disease and Related Health Problem, Tenth Revision, 1992-1994) 診断ガイドライン (表1) によって確定する。アルコール依存症は、反復する飲酒問題の結果、体内のアルコール血中濃度が常にアルコールを身体に持ち続ける状態にある。強い「飲酒渴望」が生じて、飲酒コントロールができず、退薬症候群 (withdrawal syndrome) が現れる。長期に断酒を行ったとしても、再飲酒してしまえば、自分自身をコントロールできなくなることから、「コントロール障害」とも表現される。飲酒の習慣化が生きる目的となり、仕事やその他に対する興味や関心を失ってしまう。(精神依存)

アルコール依存症には、身体の問題によるアルコール関連障害と、心理的、

表1 アルコール依存症 (alcohol dependence syndrome) ICD-10 診断ガイドライン
過去1年間に以下の項目のうち3項目以上が同時に1カ月以上続いたか、または繰り返し出現した場合

-
- 1 飲酒したいという強い欲望あるいは強迫感。
 - 2 飲酒の開始、終了、あるいは飲酒量に関して行動をコントロールすることが困難。
 - 3 禁酒あるいは減酒したときの離脱症状。
 - 4 アルコール耐性の形成より飲酒量が増加。
 - 5 飲酒にかわる楽しみや興味を無視し、飲酒せざるを得ない時間やその効果からの回復に要する時間が延長。
 - 6 明らかに有害な結果が起きているにも関わらず飲酒を継続。

社会的の問題によるアルコール関連問題が生じる。(図1・2) 個人の身体的にも精神的にも健康を損なうだけでなく、家族や友人などの人間関係、仕事などの社会生活の破綻、ついには人格の破綻をきたしてしまう病気である。人間関係上の問題—夫婦間暴力 (Domestic violence) ・離婚、子供の問題—胎児性アルコール症候群、虐待・育児放棄、社会的・法的問題—飲酒運転、犯罪行動、暴力などが挙げられる。結末が「死」と結びつくことが多く、自殺や事故死の3分の1がアルコール使用と関連があるという報告や、大量飲酒者に突然死が多いというアルコール関連突然死症候群という報告がされている^{4),5)}。

2000年にWHOは、アルコールについて以下のようにまとめている。

- ・60以上もの病気や外傷の原因になっている。

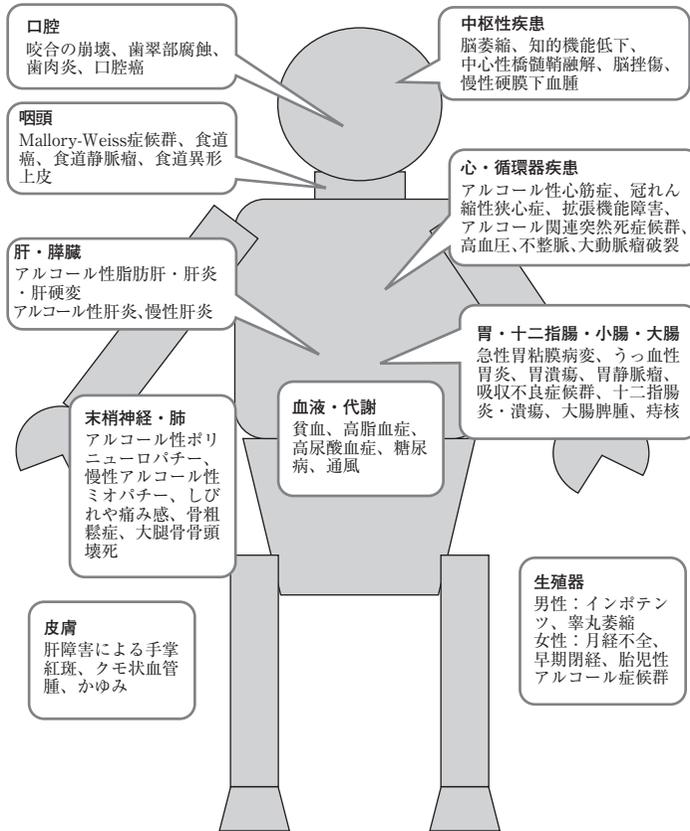


図1. アルコールによる健康被害

アルコール関連問題

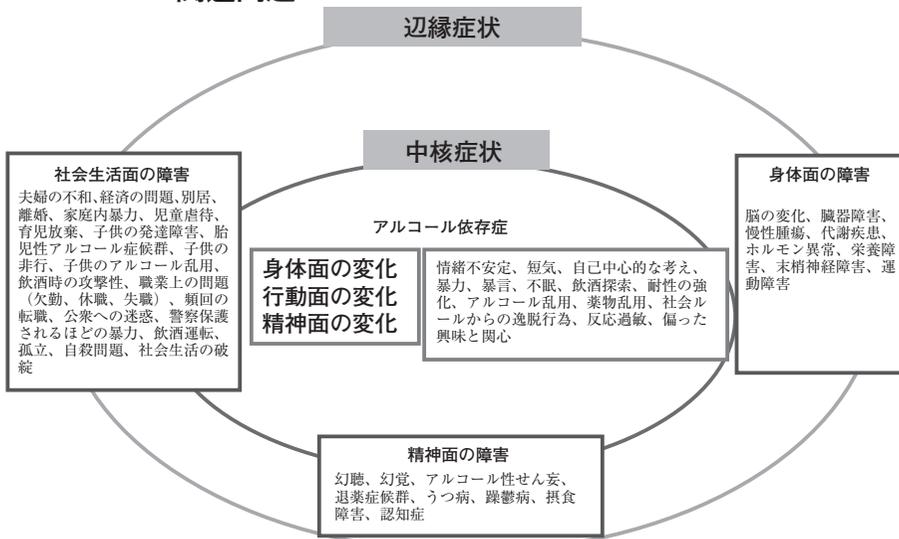


図2. アルコール関連問題図

- ・病気による社会的損失の4%はアルコールが原因で、高血圧(4%)、たばこ(4.1%)に次いで3番目に大きい。
- ・健康寿命を短縮する要因の9.2%はアルコールが原因である。
- ・アルコールにより世界で180万人が死亡した。これは全死因の3.2%を占める。
- ・発展途上国では、寿命短縮の13-15%は飲酒に伴う事故である。
- ・アルコールが家庭内暴力の最大の原因である。
- ・その他、経済的損失、未成年者への影響、妊婦への影響など計り知れなく大きい。

(WHO:EB 115/37, Public health problems caused by alcohol, reported by the secretariat, 2004; 平成20年度たばこ・アルコール対策担当者講習資料より)

2010年にWHO(World Health Organization)は、アルコール有害使用は世界的な健康問題として位置づけ、各加盟国にアルコールの有害使用状況を把握し、各国が政策の介入や研究機関、専門家団体がevidenceを生み出すことを推奨している。日本では2002年に健康増進法が制定され、健康日本21のなかでアルコール関連問題に対する対策と方針が打ち出されている¹³⁾。(表2)

表2 健康日本21におけるアルコール対策

1 多量飲酒者について	目標：多量飲酒者の減少、2割以上の減少
2 未成年者の飲酒について	目標：未成年者の飲酒をなくす
3 節度ある適度な飲酒について	目標：「節度ある適度な飲酒」の知識の普及 100%

2003年の我が国のアルコール依存症の実態調査より、AUDIT(アルコール問題簡易検査：The Alcohol Use Disorders Identification Test)12点以上は654万人、ICD-10に基づくアルコール有害な使用は218万人、アルコール依存症は80万人と推計された。しかし、実際に治療を受けている患者数は約5万人と推定され、大きな開きがある。入院受療率は入院患者数と同じく減少傾向にあり、外来受診はほぼ横ばいである。受診率は男性が高く、男女とも入院・外来と減少傾向にある⁸⁾。

平成22年度(2010年)のアルコール依存症入院治療の診療報酬改定において、「重度アルコール依存症入院医療管理加算」が認められた。その施設基準に、当該保険医療機関にアルコール依存症に関わる研修(厚生労働省精神保健課主催の久里浜式アルコール症センターにおけるアルコール研修など)を終了した作業療法士も含まれている⁹⁾。

日本のアルコール専門治療は、国立病院機構久里浜式アルコール症センターを中核に研究と実践と研鑽を重ねてきた。この領域において、作業療法士も一役を担ってきた歴史がある。精神科医療は、どの疾患もこれといった治療法は確立されていない。それは精神疾患の多様性だけでなく、その人の生育歴や家族、さらには文化的背景まで及び一定の判断を行うことが難しいところからである。

本研究の目的は、国内外のアルコール依存症領域の作業療法の文献レビューを行い、アルコール依存症の作業療法についての検討を行うことである。

方 法

国内の文献は、医学文献データベース「医学中央雑誌 web 版（医中誌 web, version 4）」を用いて、アルコール依存症に対する作業療法に関する資料を探索した。key word として「アルコール依存症」と「作業療法」を掛け合わせて、2011年 8月26日時点までに医中誌 web に登録されている文献データの抽出を行った。年代を1989年以前、1990年～1994年、1995年～1999年、2000年～2005年、2006年～2009年、2010年～2011年に区切った。

海外の文献は「alcohol」と「Occupational Therapy」を Key Word に Pub med でアルコール依存症に対する作業療法に関する資料を探索した。それでは、件数が不十分であったため、American Journal of Occupational Therapy (AJOT)、British Journal of Occupational Therapy (BJOT)、Occupational Therapy in Mental Health、OTJR: Occupation, Participation and Health について、2000年から2011年（9月発行まで分）を徒手検索を行った。

結 果

その結果、抽出された国内文献は86編であった。そのなかでも、精神科領域に該当し、OT だけでなくデイケアを含み、かつ他の医療職が発表しているものの、「作業療法」が使用されている文献を取り上げると76編が該当した。

表3は、「アルコール依存症」と「作業療法」を key word にして抽出された精神障害領域の文献を、発表年ごと、筆頭著者、文献タイトルと収載誌名と分類カテゴリーに従い整理したものである。

海外文献は、9編が抽出された。表4は、発表年、筆頭著者、文献タイトルとその内容に従い整理をしたものである。

表3 「アルコール依存症」と「作業療法」を key word で検索された文献リスト

発表年	筆頭著者	文献タイトル	収載誌名	カテゴリー
1984	小川晴美	アルコール依存症患者の作業への意識調査（断酒との関係について）	医療	会議録
1988	長雄眞一郎	精神科作業療法の実際 アルコール依存症の作業療法を通して	作業療法	会議録
	伊原幸枝	アルコール・デイケアにおける作業療法	作業療法	会議録
	長雄眞一郎	女性アルコール依存症者の回復を通して	作業療法	原著論文
1989	長雄眞一郎	アルコール依存症の絵画療法	作業療法ジャーナル	原著論文
	扇子佐紀子	单身無職者を多く含むアルコール症外来集団療法の試み	アルコール医療研究	原著論文
1990	手塚一朗	アルコール依存症者のネットワーク・セラピー	作業療法ジャーナル	原著論文
1991	鈴木健二	未成年者とアルコール問題	作業療法ジャーナル	原著論文

	伊原幸枝	アルコール依存症者に対するプレ・ホスピタル・ケアとしてのデイケア	作業療法ジャーナル	原著論文
	伊原幸枝	アルコール依存症と作業療法	作業療法ジャーナル	原著論文
	田端幸枝	アルコール依存症者専門デイケアの試みについて (その3) 作業療法士の立場から	医療	会議録
	藤松美雪	表現手段としての絵画 あるアルコール依存症者の回復より	作業療法	会議録
	小片基	アルコールならびに薬物乱用の疫学的動向	作業療法ジャーナル	原著論文
1992	秋元浩	脳器質性精神障害 アルコールによる器質性精神障害の作業療法	作業療法ジャーナル	原著論文
	猪ヶ倉雄志	行動面における青年期アルコール依存症者と青年期精神障害者との比較検討 週4何作業療法の場面から	医療	会議録
	比留川陽子	アルコール依存症者の体力評価 (第一報)	作業療法	会議録
1993	石垣達也	単身アルコール依存症患者に対する外勤作業の試み	日本社会精神医学会雑誌	会議録
1996	梨木勲	当院におけるアルコール依存症に対する取り組み	作業療法	会議録
	槌田広子	高齢のアルコール依存症者に対する陶芸の試み 活動の中で生まれた仲間について	精神保健	会議録
1997	長谷川和美	女性アルコール依存症におけるアフターミーティングの意義	作業療法	会議録
1998	長雄眞一郎	アルコール依存症 (男子) の作業処方 (第2報)	作業療法	会議録
	長谷川和美	高齢女性アルコール依存症治療における作業療法士の関わりと役割	作業療法	会議録
	鹿原典子	精神科デイケアについて 八甲病院デイケアの利用状況と援助方法の課題	青森県作業療法研究	原著論文
	佐々木良範	アルコール依存症病棟の病棟レクにおける1年の活動経過と今後の展望	青森県作業療法研究	原著論文
	宮下美香	アルコール依存症の作業療法 コラージュにおける“間”の意味	作業療法	原著論文
	加藤元一郎	アルコール症の臨床類型とその予後	作業療法ジャーナル	解説
1999	長雄眞一郎	アルコール依存におけるリカバリー概念と作業療法	作業療法ジャーナル	会議録
2000	山下聖子	【薬物依存・アルコール依存 最新の知見と作業療法】薬物依存者へのデイケアでの関わり	作業療法ジャーナル	解説/特集
	和田清	【薬物依存・アルコール依存 最新の知見と作業療法】薬物・アルコール依存の現況と問題点 違法性薬物を中心に	作業療法ジャーナル	解説/特集
	芦沢健	【薬物依存・アルコール依存 最新の知見と作業療法】アルコール・薬物依存症における自助グループの活動と意義	作業療法ジャーナル	解説/特集
	野口弘之	【薬物依存・アルコール依存 最新の知見と作業療法】民間精神病院におけるアルコール依存症の作業療法	作業療法ジャーナル	解説/特集
	山田耕一	【薬物依存・アルコール依存 最新の知見と作業療法】アルコール依存症の治療とリハビリテーション	作業療法ジャーナル	解説/特集

	池田官司	【薬物依存・アルコール依存 最新の知見と作業療法】薬物・アルコール依存の形成機序と薬物療法の動向	作業療法ジャーナル	解説／特集
	渡辺恵子	ARPにおけるクリエイティブな場の提供 ARPを意識した集団作業療法	精神保健	会議録
2001	佐々木幸信	アルコール依存症を対象とした治療グループについての報告	青森県作業療法研究	原著論文
	大川浩子	アルコール依存症の分子マーカー 姉寄進による作業療法効果判定のための基礎研究	作業療法	会議録
2002	本間俊次	精神科作業療法参加拒否患者の拒否理由に関する調査	医療	会議録
	服部節子	作業活動 (Activity) に向けられた思い 女性AL症者の回復過程における作業活動に対する変化	精神保健	会議録
	庄司真理子	アルコール依存症 多様化するニーズとその支援 高齢者を中心に考える	日本精神科看護学会誌	原著論文
2003	小宮山徳太郎	【薬物・アルコール依存症】薬物・アルコール依存症の治療から社会復帰まで	精神科	解説／特集
	中西由美子	【園芸リハビリテーション 園芸療法の基礎と事例】事例編 様々な活動 断酒活動「仲間の会作業所」	総合ケア	解説／特集
	川崎加代	土との出会い アルコール陶芸プログラムより	日本芸術療法会雑誌	会議録
	稲富宏之	精神障害者の視覚注意障害に関する研究	長崎大学医学部保健学科紀要	会議録
	長雄眞一郎	アルコール依存症と作業療法	作業療法ジャーナル	総説
2004	佐々木良範	アルコール依存症に対する作業療法の意義 断酒継続の維持を目標とした関わりから	作業療法	会議録
	佐々木良範	アルコール依存症者に対する作業療法の援助 入退院を繰り返すパターンに陥る前の関わり的重要性について	青森県作業療法研究	原著論文
	長雄眞一郎	「障害を受容する」意味について問い直す 精神障害者における「障害を受容する」意味	作業療法ジャーナル	解説／特集
	松下年子	精神科急性期治療病棟内における低構造化プログラムの試み	日本看護学論文集	原著論文
2005	田村文子	集団精神療法に適応困難なアルコール・薬物依存症者の一考察 新たなプログラム、社会資源の検討	神奈川県立精神保健医療センター研究紀要	原著論文
2006	西山美智子	アルコール依存症の「遅延性せん妄状態」とアルコール依存症治療プログラムとの関係についての調査報告	日本精神科看護学会誌	原著論文
	武藤健大	溜め込んでいた想い	北海道作業療法	会議録
	足立一	アルコール依存症に対する作業療法	作業療法ジャーナル	原著論文
2007	松本健一	アルコール治療プログラムに参加できない認知症患者への看護の試み 個別ケアを通して見えてきたもの	神奈川県立精神保健医療センター研究紀要	原著論文
	八杉基史	アルコール依存症者への集団運動プログラム (第二報) 集団運動プログラムの有効性に対する予備研究 気分尺度を用いて	作業療法おかやま	会議録
	日笠美孝	アルコール依存症者への集団運動プログラム (第一報) 個人プログラム処方システムについて	作業療法おかやま	会議録

	藤井美香	アルコール依存症者に対する新たなコミュニケーションプログラムの取り組み 参加意欲の低い対象者に対して	日本作業療法学会抄録集	会議録
	柳博文	アルコール依存症によりコルサコフ症候群を呈した症例に対するOTアプローチ	精神保健	会議録
	成崎ひとみ	【精神科チーム医療を担う専門職のこれから】作業療法士が果たしてきたこれまでの役割と今後の期待	臨床精神医学	解説/特集
2008	恩田奈保	アルコール依存症における精神科作業療法の展望 陶芸を使った「息抜き活動」における対象者の治療段階と参加し精神の関連性	日本作業療法学会抄録集	会議録
	片上麻美	女性の依存症者への治療グループの試み 一症例への関わりから	北海道作業療法	会議録
	石黒武	大工職人として木工を指導する役割を持ち、入院生活に変化を及ぼした一例	作業療法行動研究	会議録
	平井慎二	【矯正と更生の作業療法】刑事司法体系の対象者に対する援助側施設による働きかけ	作業療法ジャーナル	解説/特集
	池上淳哉	アルコール依存症者への集団運動プログラム(第三報)第二追跡研究	作業療法おかやま	会議録
	池上淳哉	入院中のアルコール依存症者を対象としたウォーキングの有用性についての一考察	作業療法おかやま	会議録
2009	緒方敬三	医療現場の精神科作業療法(臨床メモ)	熊精協会誌	解説
	水野健	高齢アルコール依存症者の行動体力と日常生活動作の関連性	日本作業療法学会抄録集	会議録
	南出耕佑	アルコール依存症患者とその家族に対する訪問看護での介入	日本作業療法学会抄録集	会議録
	中道恵	地域で生活する高齢統合失調症者のデイケア通所に向けて	日本作業療法学会抄録集	会議録
	古賀誠	退院支援のなかで試みた取り組み また家族と暮らせるように	日本作業療法学会抄録集	会議録
	南方英夫	単身のアルコール依存症者を支える試み アルコール依存症のコミュニティーを構築して	病院・地域精神医学	原著論文
	丸木雄一	認知症の早期診断、治療、そして予防	人間の医学	解説
	川上玲子	歩行困難な患者に歩行訓練と排泄訓練を中心に援助した一例「歩いてきたんじゃけえ歩いて帰りたい」の言葉を受けて	日本精神科看護学会誌	原著論文
	山口栄	アルコール依存症入院病棟における「Re 楽くす」プログラムの実践とその効果 予後調査との関連から	日本アルコール関連問題学会雑誌	原著論文
2010	北林元造	退院支援プログラムの試み 当事者の目線にあった退院支援のあり方を考えて	北海道作業療法	会議録
	渡部幸	デイケアでの安心感と満足感 易怒的な利用者を通して	山形県作業療法士会誌	原著論文
	池田朋広	【今日の精神科臨床で出会うアディクション】精神病性障害と物質使用障害の依存性障害について 精神病性併存性障害3症例への考察	精神科治療学	原著論文
2011	岩井和子	リハビリテーション関係係への招待(第2回) 治療同盟と治療共同体をめぐって心理療法に基盤を置く援助関係	精神療法	解説

表4 海外の文献リスト

発表年	筆頭著者	文献タイトル	収載誌名	内容
2000	Julia Van Deusen	The Body Image of Four Women Recovered from Alcohol Abuse	Occupational Therapy in Mental Health	事例研究
2004	Virginia C. Stoffel	An Evidence-Based and Occupational Perspective of Interventions for Persons With Substance-Use Disorders	The American Journal of Occupational Therapy	文献レビュー
2006	Sharin A. Gutman	Why Addiction Has a Chronic, Relapsing Course. The Neurobiology of Addiction : Implications for Occupational Therapy Practice	Occupational Therapy in Mental Health	文献レビューと事例研究
2006	Rachel Davies	According to the Models of Care for the Treatment of Drug Misusers, does Occupational Therapy have a Role in the Treatment of Drug Misuse?	British Journal of Occupational Therapy	解説/特集
2006	Jean McQueen	Brief Motivational Counselling for Alcohol Abusers admitted to Medical Wards	British Journal of Occupational Therapy	介入研究
2007	Antonietta Corvinelli	An Emerging Theory of Boredom in Recovery for Adult Substance Users with HIV/AIDS Attending an Urban Day Treatment Program	Occupational Therapy in Mental Health	観察研究
2007	P. Kevin Rudeen	Knowledge and Attitude about Fatal Alcohol syndrome, Fatal Alcohol Spectrum Disorders, and Alcohol Use During Pregnancy by Occupational Therapists in the Midwest	Journal of Allied Health	観察研究
2008	Linda M. Martin	Occupational Performance, Self-Esteem, and Quality of Life in Substance Addictions Recovery	OTJR : Occupation, Participation and Health	介入研究
2008	Laureen Franklin	Children With Fatal Alcohol Spectrum Disorders : problem Behaviors and Sensory Processing	The American Journal of Occupational Therapy	観察研究
2010	Rachel Davies	Self-identified occupational competencies, Limitations and priorities for change in the occupational lives of people with drug misuse problems	British Journal of Occupational Therapy	介入研究

考 察

国内文献は、1989年以前・1990年代は、現：国立病院機構久里浜アルコール症センターの出身の文献が多い。全体を通して長雄による文献が多く、事例研究を通して、アルコール依存症の回復過程に沿って、作業療法士の役割を唱え、アルコール治療過程変容モデルを作成している³⁾。(図3)

2000年以降の内容は、事例報告や治療プログラム内容の検討あるいは実践報告したものが殆どであった。その内容は、高齢者アルコール依存症や Wernicke-korsakoff 症候群に関するものが増加して、実社会の高齢化がアルコール依存症専門治療のなかにおい

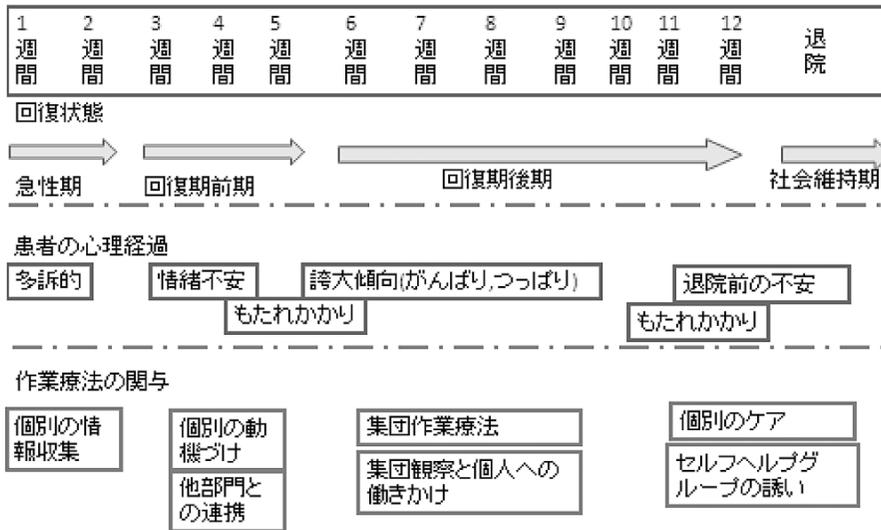


図3. アルコール治療過程変容モデル (長雄作成、文献3、P 351を一部改変して引用)

でも起こっている印象がある。国立病院機構久里浜アルコール症センターでは、入院治療プログラムが男性が成人—老人、女性と3つに区切られて実施されている¹⁰⁾。今後高齢を迎える世代は、習慣的にアルコール飲酒を身に着けている人も多く、今後も飲酒を継続することが予測できる^{4), 11)}。また発症年齢によって若年発症と高齢発症とに分けられ、その特徴も異なることから、高齢者アルコール依存症における作業療法の治療や役割を考えていかなければならない。

作業療法治療内容は、園芸、陶芸、ウォーキング、リラクゼーションなどであった。現在のアルコール依存症の増加傾向である女性アルコール依存症やヤングアダルトに対する作業療法士による文献はほとんどみられなかった。社会情勢では、アルコール依存症予防対策が主流であるが、今回の文献検索では作業療法士によるものはみられなかった。

海外文献をみていく。文献数が少ないのは、おそらく海外の作業療法士がアルコール依存症のみに従事しているだけでなく、その疾患がもつ多様性からアルコールを含む物質関連障害の専門家として位置づけられているためだと思われる。

P. Kevin Rudeen らの研究は、胎児性アルコール症候群 (FAS) を取り上げた研究であった。これは FES に対する作業療法士の知識や考えをアンケートで問うものであり、作業療法についての具体的な記述はなかった。Virginia C. Stoffel らは (2004) は、アルコール・薬物依存症者の作業療法介入には、brief intervention, 認知行動療法、動機づけ面接法、12のステッププログラムの考えや実践が模範となると報告している。一方、Sharon A. (2006) は、作業療法士は他の治療法を解釈したうえで、作業療法士独自の患者の日常生活に着目したユニークな視点を大切にしていくことを述べている。ありふれた日常生活のなかに新たな作業的役割や、習慣化やルーティンとなるものを構築

していくことが、再燃を防ぐとしている。その上で social skill やストレス対処法、感情表出の方法を取り入れることが治療として役に立つとしている。患者や家族に嗜癮に至る神経学的メカニズムを教育することで、リハビリテーションや治療への動機づけに繋がるとしている。多くの嗜癮者が、時間とお金を嗜癮に費やしていることから時間の管理や Leisure skill の必要性を説いている。

The American Occupational Therapy Association (AOTA) のアルコール・薬物依存症に対する作業療法の指針は、彼らの日常に意味のある作業をもたらし、作業的役割を造ることで、彼らの日常に変化をもたらし、薬物から離れた日常を送ることができるとしている。そしてアルコール・薬物依存症を専門とした作業療法士にマネジメントしてもらうことを推薦している。この疾患が家族など周囲の協力が必要であると訴えており、その対象者のみではなく、その周囲の環境を評価し、治療の対象としている。

全ての文献ではないが、the Model of Human Occupation (MOHO) の作業遂行歴面接第2版 (OPHI-II) や作業に関する自己評価 (OSA) などが評価として使用されており、アルコールに変わり、生活の中に新たな役割や習慣、routine を構築するという考えは、根底に MOHO が存在するように感じられた。

まとめ

「アルコール依存症」をアルコールだけで捉えることは限界があり、その他の物質・行為・関係など様々な依存が入り混じっている。嗜癮に至る神経学的メカニズムや、その人の環境を含めた評価、現代の社会情勢の把握という幅広い見識や治療の視点を有する領域である。AOTA では、アルコール・薬物依存症領域の専門家としての作業療法士が存在し、作業療法の効果や役割、治療に伴う Skill を示している。日本では、アルコール依存症領域に作業療法士が従事してきたものの、アルコール依存症の作業療法は治療内容や関与が様々で、その効果、役割が確立されていない。確かに、病院の経営や組織によって、作業療法士のアルコール依存症領域に関与する範囲が限定されているようである。しかし、平成22年度の診療改定において作業療法士は、アルコール依存症領域の治療者として必要とされており、アルコール依存症領域作業療法の「専門性」と「役割」を確立することが求められている。

文献・URL

- 1) 日本アルコール関連問題学会, 日本アルコール・薬物医学会, 日本アルコール精神医学会編集, 簡易版アルコール白書
- 2) 融道男, 中根允文, 小見山実, 岡崎祐士, 大久保義朗監訳, WHO: The ICD-10 Classification of Mental and Behavioral Disorders: Clinical Description and Diagnostic Guidelines. 精神および行動の障害臨床記述と診断ガイドライン; 61-94, 医学書院
- 3) 石井良和, 京極真, 長雄真一郎, 精神障害領域の作業療法, アルコール・薬物依存症の作業機能障害とプログラ

ム立案のコツ：343-361, 中央法規, 2010

- 4) 白倉克行, 丸山勝也編著, アルコール依存症ケース・スタディ, 新興医学出版社, 2008
- 5) Paul M.G.Emmelkamp & Ellen Vedel 著, 小林桜児・松本俊彦訳, アルコール・薬物依存
臨床ガイドエビデンスにもとづく理論と治療, 金剛出版, 2010
- 6) 樋口進, わが国の飲酒実態と多量飲酒に対する介入方法, 平成21年度たばこ・アルコール対策担当者講習会資
料.
- 7) 厚生労働省, 平成18年度たばこ・アルコール対策担当者講習会資料.
- 8) 尾崎米厚, アルコール関連障害の動向, 医学のあゆみ 233 (12): 1119-1125, 2010
- 9) 丸山勝也, 保険医療施設としてのアルコール依存症治療の点数化, 日本精神科病院協会雑誌 30 (4): 57-61, 2011
- 10) 遠藤光一, 樋口進, アルコール依存 久里浜式, 精神科治療学24増刊号: 257-259, 2009
- 11) 松下幸生, 高齢者のアルコール問題, Modern Physician 20 (8): 1033-1036, 2000
- 12) 厚生労働省, <http://www.mhlw.go.jp/>
- 13) 健康日本21, <http://www.kenkounippon21.gr.jp/>
- 14) The American Occupational Therapy Association, <http://www.aota.org/default.aspx>

Abstract

The WHO guidelines indicate a global scale to reduce health problems due to hazardous alcohol use. Japan's Health Promotion Law enacted in 2002, has come up with policy measures for alcohol-related problems in "Health Japan 21." While there were an estimated 800,000 alcoholics in Japan, the actual number of patients is approximately 50,000. With the revision of medical fees and hospital treatment of alcoholism for FY 2010, additional hospital management fees for those admitted with severe alcohol dependence have been approved for the eligible facilities. The facility requirements applicable to such facilities include having at least one occupational therapist has always played a part in the treatment of alcoholism in the past.

Using "alcoholism" and "occupational therapy" as key words, we have examined the area of occupational therapy for alcoholism in a domestic and international literature review.

The review has revealed that Japan has yet to have a unified strategy in the field of alcoholism occupational therapy while the role of occupational therapy services for substance-related disorders including alcohol is portrayed in the AOTA.

Key words: alcoholism

occupational therapy

World Health Organization

alcohol-related problems